特別支援教育の扉 №４２　　令和５年３月８日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「担当が替わっても機能する支援体制の構築」

１　園・校内支援体制の評価　※秋田県特別支援教育校内支援体制ガイドライン（三訂版）「充実度点検シート」

当てはまる□にチェックを入れて、要素（A～H）ごとにチェック数をグラフに記入し、線で結ぶ。

A　校内委員会の設置と活動

□特別支援教育に関する年間計画が立てられ，教職員で共通理解されている。

□園・校内委員会が運営計画に位置付けられ，定期的あるいは必要に応じて開催されている。

□気がかりな幼児児童生徒について，特別な支援の必要性の判断が園・校内委員会において行われている。

□幼児児童生徒・保護者への具体的な支援の方法や評価について検討が行われている。

□園・校内委員会での決定事項が全教職員に知らされ，共通理解のもと実施されている。

B　特別支援教育コーディネーター

□コーディネーターが校務分掌に明記され，教職員や保護者に周知されている。

□コーディネーターが，授業を参観するなど対象幼児児童生徒の実態把握をしている。

□コーディネーターが，担任等の悩みをよく聞き，園・校内委員会で必要に応じて話し合われている。

□外部機関との連携について，　コーディネーターが中心になって園・校内委員会で話し合われている。

□コーディネーターが中心にな　って，研修会等を計画している。

C　個別の指導計画・支援計画

□幼児児童生徒の実態を適切に捉えて個別の指導計画を作成している。

□個別の支援計画を家庭や関係機関の情報を十分に取り入れて作成している。

□個別の指導計画・支援計画が関係教職員である程度の期間で評価され，見直し，修正が行われている。

□個人情報の取り扱いに留意して，個別の指導計画・支援計画が引継ぎも含めて活用されている。

□幼児児童生徒を誰がどのように支援していくか，個別の支援計画で役割分担が明確になっている。

D　幼児児童生徒への学習・生活支援

□幼児児童生徒の実態から，得意なことと苦手なことが整理され，関係教職員で支援の方向性を共通理解している。

□必要な支援内容を整理し，目標や方法を明確にしている。

□幼児児童生徒の学習・生活支援について人的支援や場所が確保されている。

□学習・生活支援を担当する者が定期的に情報交換し，評価している。

□幼児児童生徒の変容について，随時，保護者と確認をしている。

E　保護者との連携

□保護者から幼児児童生徒への関わり方のコツや，学校への要望などを十分に聞いている。

□連絡帳や電話で幼児児童生徒の様子について保護者に伝えている。

□個別の指導計画・支援計画を活用して，保護者と十分に意見交換している。

□保護者との面談には，コーディネーターや管理職なども適宜参加している。

□保護者に学校外の相談機関や学習会の案内など情報提供ができている。

F　関係機関との連携

□コーディネーターや教頭が，関係機関への連絡等を行う役割を担っている。

□気がかりな幼児児童生徒について，前籍校（園）から情報を得ている。

□地域の特別支援教育に関する情報が随時届き全職員が知っている。

□特別な支援の必要性の判断や，具体的な支援方策の決定・評価に際しては，外部の関係機関から支援を得られる状況にある。

□幼児児童生徒が卒業する場合は，進路先に必要な情報を伝えている（伝えることとしている）。

G　管理職のリーダーシップ

□学校経営の内容（評価）に特別支援教育が位置付けられている。

□校内支援体制の充実のための，校務分掌の確認，または見直しが行われている。

□教職員や保護者・地域に向けて，特別支援教育の情報が発信されている(園・校内外での会議や通信)。

□管理職が特別支援教育の研修会に参加している（予定がある)。

□教職員を特別支援教育の研修会に計画的に参加させている。

H　教職員の共通理解

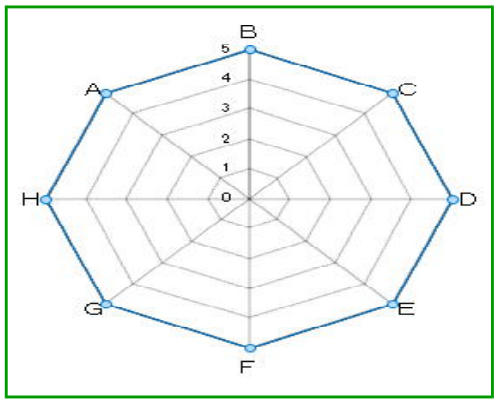
□幼児児童生徒の支援について，教職員・支援員等が定期的に話し合う場が設定されている。

□特別な支援が必要な幼児児童生徒の情報は，担任のほか関係教職員・管理職も把握している。

□特別支援教育について園・校内での研修会が設けられ，ほとんどの教職員が参加している（予定がある)。

□指導に生かせる情報を日常的に教職員間で交換している。

□コーディネーターを中心として必要に応じて情報交換をしている。



完成したグラフを基に、園・校内支援体制の成果と課題を明らかにし、改善策を考えます。

活用例　「H　教職員の共通理解」

課　題：特別な支援を必要とする子どもの情報が園・校内で共有されていない。

改善策：①職員会議後に、学年・学級から気になる子どもの様子を報告する。

②園・校内研修会、事例検討会、子どもを語る会を計画する。

２　園・校内支援体制の構築のポイント

・担任や保護者の気付きをチームで対応する。	**気付きが支援のスタート**
・３歳児、１年生をみんなで支援する。	**最初で最大の支援のチャンス**
・複数のコーディネーターを配置する。	**役割分担を明確に**
・個別の指導計画が生活とリンクしている。	**作成ではなく活用が目的**
・うまくいった支援をみんなで共有する。	**職員会議、事例検討会、通信等で共通理解を**
・保護者と思いの形が重なっている。	**ズレがあると成果が期待できない**
・地域の関係機関と連携がとれている。	**地域資源マップの作成**

３　子どもの変容の評価

①担任だけでなく、複数の教師によって客観的に評価する。

②目標が達成できない場合は、目標設定の水準を下げたり、手立てを変更したりする。

③変容した理由を保護者や関係機関と共有し、よい支援が継続できるようにする。

子どもの変容を基に目標や手立てを評価し、指導の改善につなげます。評価とは「一度立ち止まり、スタートラインに立つ」ことです。一と止の間をつなぐことで「正」しい評価になります。そして、立ち止まり少しずつ前に進むと、確かな「一歩」となります。

４　引継ぎについて（引継ぎ＝支援や思いをつなぎ合わせること　「人と人をつなぐ」こと）

・保護者の同意を得て、就学支援シート、個別の（教育）支援計画、個別の指導計画等をを基に、就学先と顔の見える引き継ぎを行い、支援の切れ目を防ぐ。

・中学校では、合格後に開催される生徒指導主事、養護教諭の連絡協議会等で気になる生徒の情報を丁寧に伝え、進学を支援の切れ目ではなく、つなぎ目とする。

とれたて直送便

「ある園の先生と５歳児の会話」

先　生：「二人は、いつも『なかよし』だね」

子ども：「先生、違うよ、ぼくたちは『仲間』なんだよ！」

人間関係は、かかわり（知人)、つながり（友人)、結びつき（親友・家族）の順で深くなり、心理的距離が近くなります。二人は自分の視点だけでなく、相手の視点（相手への思いやり）も育っています。５歳にして親友レベル（？）であり、二人の友情は永久に不滅です。